

岩国徴古館蔵『鳥類八百首』翻刻

外題「鳥類八百首」(岩国徴古館蔵・18-16)

石川 一

- 木菟 光俊朝臣
01 山風ならの葉かしは音たかしすむ耳づくも聞や驚く
梟 西行上人
02 やま深み気近き鳥の音はせで物おそろしきふくろふの聲
鴟 俊頼朝臣
03 夕ま暮鷹と見つればあら磯の波まをあさるみさご成けり
鷗 按察使公通
04 朝ぼらけあしやの興を行舟のよそめはかもめあるかとぞ見
鳩 正三位知家
05 いほりさす岡べのま柴末なびき鳩ふきはす秋のはつ風
鶉 土御門院御製
06 籠の中にまだ住なれぬひえ鳥は心なくても世をすぐすかな
鳩 堀河右大臣
07 あやしくも風におるてふさくなぎのはしばみよりもながくみゆらん
放鳥 常磐井入道太政大臣
08 山さくら散しく池のはなちどりをのが羽風も波やよすらん
鴟 俊頼朝臣
09 雨に又水そひぬなり夜もすがら物思ふやどにぬえの聲しつ
都鳥 権僧正公朝
10 舟とむる難波ほり江にきめる也これは高津の都鳥かも
百舌鳥 隆信朝臣
- 11 おも影をほの見しま野に尋ぬれば行多もしらすも草ぐき
鴟 第三御子
12 風をいたみ田中のくろの山がくれ垣ねのそばにしと鳴也
鳩 寂蓮法師
13 春の日のどかにかすむ山里に物あはれなるいかるがの聲
山陵鳥 光俊朝臣
14 山がらのまはすくるみのかくにもてあつかふは心なりけり
小陵鳥 寂蓮法師
15 友ねしてはぐみかはすこがらめの思ふ人だにある世なりけり
四十唐 同
16 朝まだきしどうからめぞたくなる冬ごもりせる虫の住かを
鴟 正三位知家
17 置霜に枯もはてなでかやくきのいかでお花の末に鳴らん
庭叩 寂蓮法師
18 女郎花おほかる野べの庭たつきさがなき事な人にをしへそ
鶉 慈鎮和尚
19 ことにわが一ごはなれてかふぬかのぬかづくことは君を折て
増子鳥 第三御子
20 冬がれの岡べにきみるてりましこ紅葉にかへる梢成けり
火焼鳥 寂蓮法師
21 思かね柴おりくぶるやまさとを猶さむしとやひたき鳴らん
都々鳥 同
22 これも又さすがに物ぞあはれなる片山かげのつゝ鳥の聲

- 23 夏の日にもゆる我身の侘しさに水こひ鳥の音をのみぞ啼(なぐ)
水乞鳥(みづこひどり) 伊勢
- 24 春されば友まどはせるはこ鳥のふたかみ山に朝なくなく
箱鳥 衣笠内大臣
佛法僧 光俊朝臣
- 25 松の尾の積しづかなる明(あけ)ほのにあふぎてきけば佛法僧なく
龍 源仲正
- 26 契あれば鶉の羽ふきける濱屋にもりうの宮姫かよひし物を
虬(うし) 俊頼朝臣
- 27 口をしや雲井がくれにすむたつも思ふ人にはみゆるなるものを
虎 中務親王
- 28 たれか今竹の林に身をすてんうへたるとら是有世成とも
熊 後嵯峨院御製
- 29 あらくまのなれてすむなるしはせ山いまもいかでかはげしかるらん
猪 為家卿
- 30 はた山のおのへつゞきの高萱にふするありとや人とよむらん
牛 衣笠内大臣
- 31 雪の嶋まきの小牛の三とせにてはなさす程もたへがたの世や
犀 寂蓮法師
- 32 うき身にはさいのいき角得てしかなそでの涙も遠ざかるやと
野干(やかん) 後京極授政
- 33 故郷の軒のひはだは草荒(あわれ)てあはれきつねのふし所かな
兔 藤原為頼
- 34 まよふなり月の光の白うさぎ雪にはふかき道も忘れて
猫 源仲正
- 35 真葛(まがせ)はらしたはひありくのらねこのなづけかたきはいもが心か
猪 寂蓮法師
- 36 人すまで鐘も音せぬふる寺にたぬきこそたゞ鼓うちけれ
鼠 土御門院御製
- 37 世を忍ぶ心のうちのあなねずみやすく出(い)べき道もあるらん
狢(むさぎ) 為兼朝臣
- 38 春日山夜ふかき杉のこずゑよりあまた落(おち)くるむさゝびの聲
貝 西行上人
- 39 波あらふ衣のうらのそでかひをしほひに風のたゝみをくかな
蝸牛 藤原為頼
- 40 家は捨(すて)ず何か難波のかたつぶりつの国ありと身を憑(たの)らん
蜻蛉 順徳院御製
- 41 かげろふは命かけたる夕露に玉のをすかく蛛(くも)のいとすち
蛛(くも) 西行上人
- 42 あまの川ながれてくだる雨をうけて玉のあみはるさゝがにのいと
蝶 定家卿
- 43 菊(きく)枯(かれ)て飛かふてふの見えぬかなさきちるはなやいのちなりけん
蝙蝠 和泉式部
- 44 人もなくい鳥もなからん嶋にてはこのかはほりを君ぞたづねん
蓑虫 祐拳
- 45 いかでかは露にもぬれん雨ふれどもらしが磯の松のみのむし
守宮 土御門院御製
- 46 神がきやいのるいはをせけれどるもりのしるし猶や見ゆらん
海月(うみづき) 源仲正
- 47 我君(わがみ)は海の月をぞ待渡(まちわたり)るくらげの骨にあふよありやと
海老尾 同
- 48 今はわれ世を海にすむおいゑびのもくずが下にかぐまりぞをる
蟹 源仲正
- 49 よこばしるあしまのかにの雪ふればあなざむげにやいそぎかくるゝ
鮎 正三位知家
- 50 ふしづくるをどろが下に住(すま)ふなのいまの命もさだめなの世や
鮎 信実朝臣
- 51 朝なく日なみそなふるかつらあゆあゆみをはこぶ道もかしこし

- 52 冬川の岸の下行水ぬるみはえある世にもあひにけるかな
鱒(はえ) 源伸正 衣笠内大臣
- 53 たれはかはあみのめ見せてすくふべき淵にしづめぬ石ぶしのみを
鯛 僧正公朝
- 54 さくらだいたいの名なれば青柳のいとをたれてや人の釣けん
鱸 衣笠内大臣
- 55 夕なぎの藤えのうらの入海にすゞきつるてふあまのをとめご
葛 為家卿
- 56 いかばかり久しかるらん亀山の麓の松にまじるさき草
日蔭草 読人不知
- 57 けふかざす神のいかきの玉ひかげむかしのことを尋てぞくる
夕かげ草 中納言家持
- 58 我やどのゆふかげ草のしら露のぬけるもことなおほくゆるかも
みなしご草 家隆卿
- 59 たぐひとてわが住やどのかべにおふるみなしご草もあはれいつまで
山橘 正三位知家
- 60 ふりにける卯月のけふの髪そぎは山たちばなの色もかはらず
茅花 為家卿
- 61 ふる川の岸のあたりは朝草につ花なみよる夏の夕かせ
鞭草 衣笠内大臣
- 62 しげり行しばをの山のくまつらくるもながき六月の空
海松 読人不知
- 63 うちよするみなかひありてよさの海のおそびの浦に比もへぬべし
百代草 法橋顯昭
- 64 もよ草百夜までなど契りけんかりそめぶしのしちのはしがき
白慈草 雅経卿
- 65 今日にあふ雲の庭のすまひ草とるてもあだにうつる物かは
爾許草 人丸
- 66 あしがきの仲のにこ草にこやかにわれと多みして人にしらるな
朮 読人不知
- 67 恋しさはそでもふらんをむさし野のうけらが花の色にいつなゆめ
濱木綿 寂蓮法師
- 68 はまゆふのかさなる数をしるべにておもひ立ける和歌のうら波
小々妻 仲実朝臣
- 69 月きよみあけの野原のしら露にさゝめ分くる衣さぬれぬ
藍 読人不知
- 70 人しれず恋はしぬとも御園生のからあるの花の色に出めや
紅 同
- 71 たが蒔しけれなるなれば三輪山のひた紅ににははせるらん
紫 中納言家持
- 72 つくば野におふるむらさききぬにそめいまだきずして色に出にけり
麻 土御門内大臣
- 73 かりはやすあさの立枝にしるきかな夏の末葉になれるけしきは
浅砂 信実朝臣
- 74 見れば又あさく生てふ沢水は底のころのねをぞあらはす
蓼 光俊朝臣
- 75 うき世には身をのみつみし水たでのからきめにこそ涙落けれ
水葱 為家卿
- 76 露結ぶ田中の井戸のなぎの葉に光さしそふたづくひかな
犬子草 同
- 77 ゑのこ草をのがころくほに出てあきをく露の玉やどるらん
土筆 同
- 78 袖姫のふでかとぞみるつくぐしゆきかき分る春のけしきは
折敷草 同
- 79 秋きぬと聞つる庭のおしき草いと露をやすへまさるらん
鏡草 為家卿
- 80 かたばみのそばに生たるかゞみ草露さへ月に影みがきつゝ

- 94 捨られしきのふの山のふしおれ木さてもかひなく世にや朽なん
ふしおれ木 為家卿
- 93 和泉なる篠田のもりの千枝ながら玉のうへ木にかざる白雪
玉植木 前大納言隆季
- 92 かげ清きなへの樹うつりきて瑠璃の扉も花さきにけり
七重樹 俊成卿
- 91 難波がた塩干の名残あくまでに人のみるめを我はともしき
和布 読人不知
- 90 いたづらに波にゆるるゝなのりそを木の丸殿にいかでうへまし
莫鳴菜 信実朝臣
- 89 風吹はあだにやれ行ばせをばのあればと身を憑むべき世か
芭蕉 西行上人
- 88 しら波の濱まつがえのたむけ草いく世までにか年のへぬらん
手向草 河嶋皇子
- 87 さしも草さしも忍ばぬ中ならば思ひありともいはまし物を
指焼草 俊成卿
- 86 此哥前二家持ニ如何
我やどのゆふかげ草のしら露のけぬがもゝとなおほゝゆる哉
夕蔭草 笠郎女
- 85 暁のめざまし草とこれをだに見つゝいままで我をしをせばせ
目覚草 読人不知
- 84 いかばかり人めこふらしかくらくのはつせにさけるやまちさの花
山ぢさ 権僧正公朝
- 83 さ山なる池のみくりのねもみねどうちはへ人のくるぞまたるゝ
光俊朝臣
- 82 蓬生はさることあれや庭の面にからす扇のなどしげるらん
莎草 光俊朝臣
- 81 河ちどり鳴や川べのおほひ草すそうちおほひ一夜ねさせよ
莞草 清輔朝臣
- 95 難波がた塩干しほみち流木のうきては沈む身こそつらけれ
ながれ木 生三位知家
- 96 風ごしにたてる山木のうは枝は花も紅葉もある時ぞなき
山木 光俊朝臣
- 97 いかにせん尾上にたてるうつほ木のあな恋しともいはぬ思ひを
うつほ木 同
- 98 柚山にたてるふし木のいたづらになど引人のなき身なるらん
ふし木 藤原教嗣朝臣
- 99 よとともに波こそ磯のそなれ木のしづ多や恋の衣なるらん
そなれ木 修理大夫顕遠
- 100 涙川はるの月日のたつごとに身はしづみ木の下に朽つゝ
しづみ木 定家卿
- 101 わざとこそくり放つめれまがり木のはひまつはるゝ青つゞらをば
まがり木 重之
- 102 住家ぞと思ふもくるしくるゝ木をこりつゝ人のかへる山べに
くるゝ木 和泉式部
- 103 帯木はおもふふせやと思へばやちかづくまゝにかくれ行らん
はゝき木 俊頼朝臣
- 104 冬山の雪まにたてるあはれ木のうへにぞくゆるかくすつみなく
あはれ木 源順
- 105 恋しなば昔むすつかにかえ古てもとの契りの朽やはてなん
柏 定家卿
- 106 何となく我身はふけぬ三度まで月のかつらを折とせしまに
榎 素覚法師
- 107 ひさぎ生ふるさほの河原に立千どり空さへ清き月に鳴也
枝保持 寂蓮法師
- 108 浪のうへになるはかくれし四の緒のちぎりも深きしほち成けり
榎 光明峰寺入道撰政

- 109 朽ねたゞ思ひくらぶの山高みたつをだまきはしる人もなし
梨 為家卿
- 110 閒渡る面影見えて春雨の枝にかゝれるやまなしの花
李 同
- 111 消がての雪と見るまで山児のかきほのすもゝ花さきにけり
杏 光俊朝臣
- 112 ことばにも聞しらじとやからもゝの物をばいはで花にのみさく
あから柏 読人不知
- 113 いなみ野のあから柏はきはあれど君をあがおもふ時はさねなし
児手柏 同
- 114 なら山のこの手かしはの二おもてとにもかくにもねぢけ人も
あからかしは 同
- 115 白雪の降つもりぬるおく山はあからかしはも埋もれにけり
青柏 読人不知
- 116 君がため我もる山の青がしは万代までにもえまざるなん
ながめがしは 信実朝臣
- 117 雨やまずふるからをのゝ遠方にながめがしはも名にしおふらん
あさ柏 家長朝臣
- 118 見るからに色に出行あさがしはぬるや時雨のしのゝめの空
ならの葉がしは 為家卿
- 119 かた野なるならのはがしは吹風に霰ふりそふ音のはげしさ
みつのかしは 家隆卿
- 120 万代もなを長月のそらにあふみつのかしはにみきたてまつる
榎 藤原道経
- 121 冬寒みあなの中山越くればならのかしはに霰ふるなり
椎 慈鎮和尚
- 122 今はたゞ空だのめにもこりねとやまぢかね山の嶺の椎柴
さゝくり 寂然法師
- 123 山かぜに峰のさゝ栗はらゝくと庭に落ちる大原の里
- 124 きみが代はおほ初瀬路の百枝榎もゝえながらもさかへますかな
榎 俊頼朝臣
- 125 ともものうら波路はるかに漕舟のそがひにみゆる磯のむろの木
粉(檉或イ) 源仲業
- 126 里人や若葉つむらんはたつもり外山も今は春めきにけり
榎 為家卿
- 127 あはれなるしきみの花の契りかな佛のために種やまきけん
榎 衣笠内大臣
- 128 ゆづる葉の常盤のいろも埋もれてあらくま山に雪のふれゝば
津間々 為家卿
- 129 よとゝもに波のゆふこそかけつらめ神さびわたる磯のつまゝに
合飲木 家持卿
- 130 わぎもこがたみのかうか花にのみさきてけらしもみにならずかも
胡桃 衣笠内大臣
- 131 夏山のすそ野にしげきくるみ原くるみいとふな行てうらみん
榎 衣笠内大臣
- 132 きりたをす田上山のかしの木はうちちの川瀬に流れきにけり
榎 為家卿
- 133 大井川しぐるゝ秋のいちあだに山やあらしの色をかすらん
猿滑 同
- 134 足引の山のかけちのさるなめりすべらかにても世を渡らばや
糖 同
- 135 小山田の苗代ぐみの春過て我身の色に出にけるかな
榛(一梅或イ) 為家卿
- 136 いざゝらば茂りあひたるとがの木のとがゝしさをたてゝ過なん
漆 同
- 137 紅はをのが身に似ぬうるしの木ぬると時雨に何かはるらん
もちひの木 同

- 138 君がすむやどの軒ばのもちゐの木かはらぬ色は常盤かきはに
黄楊 同
- 139 しづのめがかしらけつらず朝夕につげのをぐしや取まなからん
辛夷 為家卿
- 140 うちたへて手をにぎりたるこぶしの木心せばさを歎く比かな
ひいら木 同
- 141 世中は数ならずともひいら木のいろに出てはいはじとぞおもふ
そばの木 同
- 142 ありとても人もすさめぬそばの木たどかたそばにすごすべき哉
ねずもち 同
- 143 かた山のおどろにまじるねずもちの引人ありと憑むべき世か
こめく 為家卿
- 144 秋ふかき山の夕霧こめくをのれと色やまづかはららん
うばめの木 同
- 145 冬くれば霜をいたゞくうばめの木老のすがたやいとどみゆらん
ねぶの木 同
- 146 秋といへば長夜あかすねぶの木もねられぬ程にすめる月かな
すろの木 同
- 147 朝まだき梢ばかりに音たててすろの木過るむら時雨哉
めづら 為家卿
- 148 朝霧のもる山かけの下めづらめづらしげなくぬるゝ袖かな
檜(榎或イ) 同
- 149 河ばたの岸のえの木を重み道行人のやどらぬはなし
柿 信実朝臣
- 150 いにしへのやまと詞のあととめてはるかにあふぐ柿の本かな
桑 知家卿
- 151 わぎもこがこやのゑびらの数多みあまたしめつる菌の桑ばら
あせみ 光俊朝臣
- 152 おそろしやあせみの枝を折焼て南に向ひいのる祈りは
硯 源仲正
- 153 大原は行てや見ましいつしかと開いちしばの花のしるべに
樟 信実朝臣
- 154 たかせさすさほの川原のくぬぎ原色づくみれば秋のくれかも
仙家 源兼昌
- 155 のりて行鶴の羽風に雲晴て月もさやけくすむ山べかな
故宮 信実朝臣
- 156 生かくる梢もあらずふりにけり桧原の宮の秋の紅葉ば
窟 家隆卿
- 157 よし野山奥のいは屋をみぬ人や雪ふるやどを近しといふらん
屋形 為家卿
- 158 かりやかたまたや結はんいほさきのすみだ川原にけふも暮しつ
郡 読人不知
- 159 かひの国つるのこほりのいた野なる白玉こ菅かさぬひてん
驛 藤原資隆朝臣
- 160 ほとゝぎす聞ゆることもなし原のむまやくと待あかしつる
梶 為家卿
- 161 夕顔のみさへむなしきとほそこそさしてうき世のこともしらるれ
棟 俊頼朝臣
- 162 あれはてゝむねまばらなる山里はちる紅葉ばを床にこそしけ
御調 同
- 163 御つき物ひく桑まゆの絲をもてる手もたゆくそなへつるかな
酒 俊頼朝臣
- 164 竹のはにうかべる菊をかたぶけて我のみ沈むなげきをぞする
葉 家隆卿
- 165 君がためよもぎが鳴もよりぬべししくすりとする住吉の浦
文 権僧正朝
- 166 何として内外の文を学びけんまくものぶるも物うかる世に
硯 源仲正

- 167 いつはりの名をのみ立てあひみぬは硯のうへの塵や吹けん
太刀 家隆卿
- 168 旅人の草のまくらにをくたちのさやの中山けふや越なん
刀 為家卿
- 169 捨はず身はさびはてぬふるがたなすがに世をば思ひたてども
鞆 知家卿
- 170 辻まつりけふを晴とも見せざやのさきおりかけてねるやたがこそ
箭 源仲正
- 171 我恋はくるりいながす川の瀬に立ぬる鳥のあととはかもなし
藤行 源仲正
- 172 よとともにもゑこそあはせねむかばきのかた皮もなき恋をのみして
沓 為家卿
- 173 踏分てたれいそぐらん九多のとのへに積る雪の深くつ
杖 中務卿親王 鎌倉
- 174 たらちめのいさめし杖の年をへてよはるはさこそかなしかりけめ
鞆 為家卿
- 175 まりの庭に柳さくらを移し置て春は錦にたちやまじらん
蓑 信実朝臣
- 176 きまほしき世のうき時のかくれ蓑なにかは山の奥もゆかしき
笠 中務卿親王 鎌倉
- 177 まのゝ浦のこ昔の笠を取もあへず時雨て渡るよどのつぎ橋
鼓 寂蓮法師
- 178 さ夜深き貴船のおくの松風にきねがつゞみのかたおろしなる
卒塔婆 同
- 179 あさ茅原ふるきそとばに契りをか隣とならばあはれとも見よ
金 家持卿
- 180 すべらぎの御代さかへんと東なるみちのく山に金はなさく
寶 従一位教良
- 181 神代より三種のたから傳りて豊あし原のしるしとぞなる
- 182 七わたの玉にも緒をばぬく物をおもふ心をいかでとをさん
玉 清輔朝臣
- 183 石だゝみありけるものを君に又しく物なしと思ひけるかな
櫛 皇太后宮大式
- 184 あふことをとふやゆふけのうらまさにつげのをぐしもしるしみせなん
鬘 為家卿
- 185 末ながく憑みしかども玉かづらいかなるすぢに懸はなれけん
笥笥 光俊朝臣
- 186 をのづからかたみにもらぬ水は有て命のとまる世やなかるらん
火取 為家卿
- 187 たき物のくゆる煙の下むせび我ひとりとや身をこがすらん
挿頭 家隆卿
- 188 敷島や三輪の檢原も万代の君ががざしと折やそめけん
蓑麻 衣笠内大臣
- 189 今一目いもを三室の神にこそぬさとりむけて折わたらめ
志折 定家卿
- 190 かりにゆふしをりも雪に埋もれてたづねぞわぶるもすの草ぐき
標 家隆卿
- 191 ながき世のためしに引かん鈴鹿川こえていつきのわたらひのしめ
蓑 為家卿
- 192 引かけて思ひなよりそあからものあからさまにも人しりぬべし
袴 権僧正公朝
- 193 ふる雪に落草とむる犬かひの波の袴は見るもおそろし
袋 和泉式部
- 194 そでみればうれしき物をつゝみたる袋かへしつかけてのみ見ん
紐 衣笠内大臣
- 195 あひがたき八巻の法の花のひもむすぶ契りはみなしからじを
帯 西園寺入道太政大臣

- 196 谷川の氷の帯やむすぶらんをとこそきかねきびの中山
綾 為家卿
- 197 吹はらふ風にたゞよふ雲鳥のあやうやうきて世を過るみは
錦 玄有法師
- 198 唐国の錦をれることの葉もみゆるばかりにすめる月影
機 光俊朝臣
- 199 山がつのあきでにかけてをるはたのおさくしきは我身なりけり
斤 衣笠内大臣
- 200 たれもみな心にかけて思へかしごうのはかりのをもさ軽さを
櫃 西行上人
- 201 おりびつに花のくだ物つみてけりよしのゝ人の宮たてにして
樋 光俊朝臣
- 202 踏こゆる道にふせたる瓦ひのくつともしらじ埋もるゝ身は
筏 後嵯峨院御製
- 203 亀山の嶺立こえてみ渡せば清瀧川におとす筏し
楫 光俊朝臣
- 204 波たつるぬさの追風はやればまかぢすがぬき渡る舟人
碇 信実朝臣
- 205 興つ舟おろすいかりの綱よはみあやうからぬも猶ぞあやうき
綱 慈鎮和尚
- 206 思しる心をつなを四方に引て老のね覚のみだれ行かな
繩 為家卿
- 207 つらきかな山の柚木の我ながらうつ墨なはにひかぬ心は
緒 慈鎮和尚
- 208 むすぼをる心のをこそかなしけれ思ひしとけばとけやすき身を
網 俊頼朝臣
- 209 あふ事はまれかの浦にあさりするあみもさのみや人めもるべき
魚梁 洞院摂政
- 210 早川にやなうち渡すあだ人のこゝろの瀬にぞ思ひわびぬる
- 211 ふる雪のしら髪までにおほ君につかへまつればたふとくも有か
院 橋左大臣
- 212 たま椿二たび色はかはるともはこやの山の御代はつきせじ
春宮 同
- 213 呉竹のそのよりうつる春の宮かねても千世の色は見えにき
中宮 家隆卿
- 214 重ねてもかねて千年のしるきかな春に立そふ秋のみや人
親王 野宮左大臣
- 215 色かへぬたけの苑なる鶯はいく万世の春をまつらん
將軍 寂蓮法師
- 216 下の帯のむすぶ氷にてをかけて空にぞうくる弓張の月
大臣 藤原有季朝臣
- 217 世をてらせかげなびく星の位山なをさかゆかん末もはるかに
哥人 家長朝臣
- 218 梨壺のむかしの跡にたちかへり和哥の浦にぞなみのより人
翁 権僧正公朝
- 219 世の中はきたのおきな馬なれやよきもあしきものをしらねば
法師 信実朝臣
- 220 山ぶしの姿け遠きかはごろも心こはくも身にそはぬかな
尼 衣笠内大臣
- 221 黒髪の色はかはらぬさげ尼のまことのすぢに身はなびきつゝ
優婆塞 権中納言師時
- 222 うばそくはをこなひすらし槇の立あら中山にまぶしさしつゝ
稚子 為家卿
- 223 捨て行人したふこの片いざり世に立やらぬ音こそなかるれ
未通女 中務卿親王 鎌倉
- 224 冬されば初瀬をとめの袖さえて手にまく玉と散あられ哉
鳴子 読人不知

- 225 後(ご)つゝに命しにけりみづの江の浦嶋のこが家路をぞ見る
 定家卿 婦女
- 226 玉簾おなじ緑もたをやめの染(そ)る衣にかほる春風
 人丸 妹
- 227 久堅のあまてる月の入(い)りかばなにゝなぞへていもを忍(しの)ばん
 読人不知 我妹子
- 228 わぎも子に逢(あ)夜しもなみするがなる富士の高ねのもえつゝかあらん
 妻 衣笠内大臣
- 229 をとめごがあはせ衣のかくれづまうすき契りにうらみわびつゝ
 使 慈鎮和尚
- 230 君が代の尽ぬ千年の友とならん老(おい)のつかひになしとこたへよ
 商人 定家卿
- 231 辰の市や日をまつ賤(せ)の其(それ)ならば明日しらぬ身にかへて逢(あ)まし
 夷 道因法師
- 232 便(た)あらば使のおさにとめられてゑぞかへらぬといもに告(つ)げや
 田子 嘉陽門院越前
- 233 恋路にもおり立(たち)ねればよそにみしたごのもすそを袂(たもと)にぞしる
 匠 人丸
- 234 とにかくに物は思はずひだたくみうつ墨繩(すみづな)のたゞ一すぢに
 遊女 法橋頭昭
- 235 芦(あし)ま分(わけ)月にうたひて漕舟(こいぶね)に心ぞ先はのりうつりぬる
 遊子 石川郎女
- 236 あそびおと我はきつるを宿かざす我をかへせりをそのたはれを
 傀儡 為家卿
- 237 かりそめのをばたの里のとまびさしとまらぬそでの露をみせばや
 山左(やまがひ) 衣笠内大臣
- 238 山がつのしづのあさぎぬみしづつき草とる田井にたゝぬ日はなし
 健男 人丸
- 239 ますらをほとものぞめきになくさむる心もあらん我ぞ苦しき
 公事 雅経卿
- 240 人のおさの神のをしへにしたがひてこえゝくすめる九重の庭
 賤人 為家卿
- 241 しづのめがあさでほす手の玉だすき思ひかくればちかふ世もうし
 総角 定家卿
- 242 あげまきは跡だに絶(た)る庭もせにをのれむすべと茂る夏草
 垂髪子 信実朝臣
- 243 うなひごがうちたれ髪をふり分(わけ)てむかひつづてのあおでかざすなり
 奴僕 藤原清尹朝臣
- 244 神やつこ取やなにぞも千早振(ふる)賀茂のまつりにあふひ成(なり)けり
 唐人 二条太皇太后宮肥後
- 245 から人の衣にかざるしら玉のみがくひかりのめづらしきかな
 楊貴妃 権中納言長方
- 246 まぼろしはたまの臺(たい)に尋(たず)きてむかしの秋のちぎりをぞ聞(き)く
 李夫人 定家卿
- 247 ほのかなる煙りはたぐふほどもなしなれし雲井(くもい)に立(た)かへれども
 王昭君 定家卿
- 248 うつすともくもりあらじと憑(た)みこしかゞみの影のまづつらきかな
 上陽人 長方卿
- 249 はかなしやむなしき床に明暮(あけくれ)て年の六十の空にすぎぬる
 陵園妾 定家卿
- 250 馴(な)きにしそらの光の恋しさにひとりしほるゝ菊のうは露
 大嘗会 同
- 251 君が代の千世に千世そふ御祓(みそぎ)して二度すめる賀茂の川水
 元服 俊頼朝臣
- 252 うなひごがはなだの髪を取立(うりたて)てまきそめ川上淵瀬かはるな
 行幸 光俊朝臣
- 253 とのもりの夜のみゆきにともす火のあきらけき代(よ)に成(なり)にけるかな
 公事 雅経卿

- 254 あら玉の春を向ふる年の内におにこもれりとやらふ聲かな
占 読人不知
- 255 玉銚(たまづき)の道行(みちゆき)うらにうらなへばいもにあはんと我にいひつる

右一卷依京兆殿命馳免豪訖

延徳三年正月廿日

権中納言為廣(在判)

〔解題〕

岩国徴古館蔵『鳥類八百首』(二八一六、M)。縦二七・五cm×横一一・八cm。袋綴じ一冊本。墨付き三十三丁。和歌一行書。江戸初期写。

本奥書にあるように、延徳三(一四九一)年正月に冷泉為廣が細川政元(京兆・右京大夫)の殿命によって写した本の転写本である。「木菟」以下、二五〇余首を夫木和歌抄より抜書したものとされている(『和歌大辞典』明治書院・昭61)が、実際には歌数の点においても外題「鳥類八百首」と大きく異なるのみならず、その内容においても「鳥(木菟)」以下、「獸・草・木」の他に、「住家・武器・布・公事」などの雑題からの抜書である。

Abstract

**A Reprint of 800 *Bird Waka Poems* Preserved
in Iwakuni Chouko-kan Library**

Hajime ISHIKAWA

The following is a reprint of *800 Bird Waka Poems* preserved in Iwakuni Chouko-kan Library. Its postscript shows that this collection of poems is a transcript of a book which Masamoto Hosokawa ordered Tamehiro Reizei to transcribe in January 1943 (the third year of the Entoku Era). According to *A Dictionary of Waka Poems*, more than 250 poems in this collection come from *A collection of Fuboku Waka Poems*. However, not all of them are bird poems: they include poems of various topics such as animals, grass, trees, houses, weapons, cloth, and official duties. Therefore, the title of the collection does not represent its content precisely.